

Title	日本神話研究(肥後和男著, 河出書房發行)
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.2 (1938. 11) ,p.186(332)- 187(333)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0187">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0187</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

い。その理由は、日本文化は支那大陸文化を攝取して徳川時代までに一通りの生長を遂げ、明治の開國と共に國際的國家として登場し、歐米文化輸入後は全く新たな時代に入つたものといはなければならない。故に日本文化史は大きく明治を境としてその前後に分つべきで、後者即ち明治以後の文化史は嚴密には學的不可能事といはなければならない。この見地から嚴密なる意味に於ての日本文化史は寧ろわれわれに課せられた將來の課題でなければならぬからである。

本書は僅々百二三十頁の小冊子であるが、從來の學問藝術宗教等の數項目の羅列に過ぎなかつた所謂日本文化史とは異り、前述の如くはつきりした文化史觀に基き各時代を概觀したもので、この方面に類書の少い今日一讀に値すると思ふ。(四六判一三四頁定價五十五錢) (淺子勝二郎)

### 日本神話研究 (肥後和男著 河出書房發行)

神信仰について」、「建御名方神について」、「賀茂傳說考」、「八幡神について」、「稻荷傳說」、「日本神話の觀念」、「國常立尊について」、「日本神話に於ける國家起源の問題」、「倭姬命考」である。著者は卷頭にその研究上の立場と意圖を明かにし、それを以つて統一的理解へのよすがとされてゐる。著者の立場は、自ら歴史的、民俗的立場といはれてゐる様に、民俗學的方法によつて古代の民族生活の態様を明かにし、古代傳承をその生活的基礎に於いて把握しようとするにある。その場合著者は、古代傳承の發展過程の究明に、即ち古代傳承の歴史的研究に主點を置かれるのである。

右の如き著者の立場にとつて、最も大なる困難は民俗的資料と文獻的資料の交渉に在ると思はれる。それは民俗的事象の歴史性の追究と古典の文獻學的批判とを基礎として、初めて正確な關係を論斷し得るのであつて、此の間の勞苦は容易ならぬものがあらう。然もこの立場を『一つの試み』から方法論的確立に至らしめる途は唯一つ、個々の問題に就ての研究の集積あるのみである。

故高木敏雄氏の「日本神話傳説の研究」、松村武雄博士の「神話學論考」、松本信廣教授の「日本神話の研究」等を有するわが神話學界は、新に肥後氏の論文集「日本神話研究」を加へることが出来た。

本書は昭和六年以降、雑誌その他に發表せられた十一篇の論文を年代順に集成せられたものである。その論題を列舉すれば、「素戔鳴尊雜考」(鞍馬の竹切について、山の神としての素戔鳴尊、芙蓉神社の輪ぐりの神事の三篇を含む)「大物主神について」、「疫

峰を望まれてゐることであらう。私は著者の今後に大いなる期待新たなる學問の展開に、有效な楔機となるのではなからうか。素よりそれは言ふ可くして爲し難い大事業である。舊稿の集成上に立つた著者は、恐らく目前に擴がる雲海を隔てゝ古代傳承の秀峰を望まれてゐることであらう。私は著者の今後に大いなる期待

をかけずには居られぬ。

此處に集められた諸論文は、何れもその發表當時批評や紹介を経てゐるから、最新の筆になる倭姫命考について一言するに止めたい。著者は日本武尊が固有名詞でなく歴史朝廷の勇者或は天皇を指稱する普通名詞であるより推して、倭姫命も『ひとり垂仁天皇の皇女にして、景行天皇の御妹なりし一女性をのみさし奉つたものではなく、同じ範疇に入るべき多くのヤマトヒメがあらせられた筈である』と倣し、『ヤマトヒメとよばれたものが、古代日本に於ていかにして成立したか、いかなる位置を占めるものであるか』を研究されたのである。その結果、ヤマトヒメなる觀念は大和朝廷の大八洲國統一を背景とし、天照大神の國家支配の成就を基礎として始めて成立すること、従つて崇神天皇から景行天皇の時代にかけてこの命が出現されてゐるのに充分な理由があることを説かれ『ヤマトヒメの如きは更に大きな位置が古代史上に要求されてよいのではないか』と結ばれてゐる。

誠に示唆に富める見解ではあるが、尙ほ若干異論を挾む餘地がないではない。崇神、垂仁期に於ける神寶の強徵、國家的祭祀の施行、神宮と皇居との分離、天照大神の巡行等は何れも大和朝廷の宗教的征服の事蹟を語るものではあるまい。従つて倭姫なる名は、此の時期に活躍した女性の齋主に附與せられた名稱と解すべきではないであらうか。又著者は倭迹迹日百襲姫命を耶馬臺の卑彌呼に、倭姫命を宗女壹與に充てられてゐるが、史料の據るべきものが此の種の比定に、どれ程の價値があるかを疑問に思ふ。尙ほこの研究に於て、倭姫命に關する最も詳しい文獻たる倭

姫命世記が、『この書の成立についてはなほ充分明かでないものが多い』との理由で、全く顧みられなかつたのは遺憾である。世記については夙に伴信友の詳細な註釋もある程であるから、文獻學的批判を經て充分活用して欲しかつた。以上は倭姫命考の讀後感の大要である。

ともかく本書は、我國神話研究史上の一記念塔として、斯學研究者は勿論古代文化に關心を有する人々に是非一讀をお薦めする。終りに著者の眞摯なる研究態度に敬意を表すると共に、今後の活躍を祈つて筆を擱く。(四五二頁・定價參圓五拾錢)(中井信彦)

## 株仲間の研究

(宮本又次著  
日本經濟史研究所  
研究叢書第九冊)

本書は、徳川時代の組合的結合たる株仲間に關する、綜合的研究である。

著者は先づ緒論において、先行形態としての座と、集權的封建社會への過渡的様相たる樂座を觀察した後、鎖國による商品貨幣經濟進展の頓挫と集權的封建社會の固定による商工の世界に於ける保守、傳統、特權、統制の尊重に、株仲間成立の根本的理由を認めて居られる。

次で第二章「株仲間の成立」に於いて、江戸・大坂その他各地の株仲間成立事情を通觀し、その綜合によつて十條の原因を擧げ要するにそれが公的權力側の必要に出たものであること、又それらの原因には時代的に變化のあることを指摘されてゐる。